

哲学の対話において一人ひとりのユニークネス（唯一性）を捉える—H.アールントの思想に基づいて対話活動を評価する試みとその考察—

Capturing the Uniqueness of Each Individual in Philosophical Dialogue: An Attempt to Evaluate Dialogue Activities Based on H. Arendt's Thought and its Considerations

本山 修（長野県松本筑摩高等学校）

【要旨】

H.アールントは公共的な空間においては活動と言論によって人格の唯一性(ユニークネス)が現れると述べた。これに基づき、本実践研究は高等学校の科目「倫理」において全員が発話の機会をもつ対話活動を行い、対話に参加する生徒の唯一性をどのように捉え、評価しうるか、アールントの説く言論についての3つの解釈を評価規準にすることで試みた。序列化を前提とする評価とは別の次元の、対話活動に対する評価の在り方の可能性を探り、一人ひとりの対話活動を捕捉するための手立ての1つを示した。

H. Arendt stated that in public spaces, uniqueness of personality emerges through activity and speech. Based on this, this practical study attempted to find out how the uniqueness of the students participating in dialogue activities in the high school course “Ethics,” in which all students have the opportunity to speak, can be captured and evaluated by using Arendt’s three interpretations of speech as the evaluation criteria. This practice explored the possibility of evaluating dialogic activities in a different dimension from the evaluation based on ranking, and showed one way to capture each individual’s dialogic activities.

【キーワード】

H.アールント 言論 ユニークネス 対話活動の評価

Hannah Arendt, Speech act, Uniqueness, Evaluation of dialogue activity

1. 問題の所在

H.アーレントはその著『活動的生』において以下のように述べている。

行為し語りつつ人間は、自分が誰であるかをそのつどあらわにし、自分という存在が人格として唯一無比であることを能動的に示す。かくして人間は、いわば、それまでは自分が姿を見せることのなかった世界という舞台に、登場するのである。(中略) ある人が何であるか、つまり性質、天分、才能、欠点などは、われわれの所有物であって、それゆえ少なくとも、それを見せたり隠したりすることがわれわれの自由になる程度には、われわれの手中にありコントロールできる。これと違って、ある人が真に人格としてそのつど誰であるかは、われわれのコントロールから逃れてしまう。なぜならそれは、われわれの言葉と行ないすべてのうちに何気なく、ともにおのずからあらわとなるからである⁽¹⁾。

アーレントのこの思想を教室という空間において援用するならば⁽²⁾、語られる言葉によって「自分という存在が人格として唯一無比であること」⁽³⁾、つまり、人格の唯一性（ユニークネス）が自身のコントロールを離れて他者へとおのずと現れよう。これは「発言せず、ただ聞いているだけでもいい」⁽⁴⁾とされることもある哲学対話のルールとは異なり、語る行為を前提とする⁽⁵⁾。仮に、語り出された言葉からユニークネスを捉えうとするならば、それは教室で行われる対話活動について、そこに参加した一人ひとりについて、かけがえのない存在として、他者との関わりの中にあつた確かな存在意義を認めることができるはずである。つまり、量的な差異を基盤とした数値化による評価だけでは捉えきれない、他者との関わり（実質的な参加）において現れた一人ひとりの存在の実質を見いだすことができる。それでは、生徒一人ひとりが語る時、教室における対話活動（パフォーマンス）においてその唯一性としてのユニークネスを教師はどのようにして掬い上げて捉えることが可能であるのか。また、ユニークネスは語られる言葉を通じて生徒の間にどのように作用し、どのような事態をもたらしたと把握し、評価しうるのか。筆者の担当した高等学校の科目「倫理」における対話活動からこれらの問題についての探究を試み、生徒の対話活動を質的に捉え、評価する試みを一つの実践研究⁽⁶⁾を通じて以下に示したい。

2. 先行研究が示す到達点

エチェベリアとハンナムは、アーレントの示す「自分という存在が人格として唯一無比であること」が、語る人間について、教室という空間においても現れることをリップマン、シャープによる「子どもの哲学」(philosophy for children)の理論に依拠しながら、デューイによる民主主義論をも踏まえて、自身による「子どもの哲学」の実践を通じて以下のように示している。

「子どもの哲学」に参加する各々の子どもは、自分たちの仲間とともに他者の世界において自分たちの始まりを作り出すことができるかけがえのない存在となる。「子ど

もの哲学」が学校、あるいは他の場所であろうと、民主的な教育の場となる可能性を有し、ここでは、ユニークな人間同士が複数性の状態で共に話し合い、活動することができるため、自由が世界に存在する場所でもある⁽⁷⁾。

エチェベリアとハンナムは対話活動により学校の教室が公共的な空間となり、さらに子どもたちが市民社会（民主主義の空間）へと踏み出すためのリハーサルになるとし、アーレントの思想を教育に援用することが可能であることを述べている。ただし、語られる言葉から生まれてくる「ユニークな人間」とは何であり、それが「かけがえのない存在」として「現れる」とは教育の場において具体的にどのような事態を指すのかについては、「複数性の状態（原文：condition of plurality）」という言葉が続けて用いられているのみである。ここにおいて、複数の状態における対話活動のなかで一人ひとりの生徒のユニークネスとそれらの関わり合いをどのように捉えることができるのかという問いが立ち上がるだろう。また、アーレントの先の言葉を「対話的な学び」に援用するためには、単にその場に居ることから飛躍し、世界へ現れる実質的な「語る」行為が欠かせないはずである。そこで、本実践研究では、拙稿に示すように全員が1対1による対話を、相手を換えながら繰り返すことで発話の実質的な機会を複数回確保でき、多様な複数の意見（思考）にも接しうる対話法⁽⁸⁾を採用することにする。それは、「子どもの哲学」などの多人数の対話活動において生じうる困難（話したくとも話せない者・話さない者がいることなど）を解消するためでもある。こうした方法論を本実践が採用することを踏まえたうえで、改めてアーレントが示した「語り」、つまり、「言論」に関する見解について以下に明らかにしておきたい。

3. アーレントが示す「言論」に対する3つの解釈とユニークネスの関係

アーレントが互いに「自分という存在が人格として唯一無比であること」を際立たせ、区別するものとして示した「言論」という概念を理解するうえで、橋爪は闘技型・了解型・物語性の3つの立場による解釈があることをレビューし、腑分けしている⁽⁹⁾。本来これら3つはアーレント研究における別個の解釈ではあるが、人間存在の唯一性を尊重するアーレント思想の共通の基盤はそれぞれにあると解釈できる。加えて、そもそも橋爪は上記3つの立場の振り幅の大きさについて、アーレント自身がそれを多義的に用いていることに起因するとしている⁽¹⁰⁾。つまり、それぞれの場面に対応させてアーレントが異なる固有の意義を含ませた妥当性があると考えられ、これに立脚してユニークネスを一人ひとりの「言論（語る言葉）」から多義的・多元的に捉えるための3つの異なる視座も示唆されていると捉えたい。つまり、3つの異なる視座を利用して生徒の対話活動を評価することで、生徒のユニークネスを様々な次元から多重的、多角的に掬い取ることができる可能性を見いだすのである。これらの3つの視座を対話活動における話者（生徒）の評価に利用するため、本実践における生徒による対話活動（言論）に引き寄せて以下のa～cのように筆者がそれぞれを解釈し直して再構成し、生徒の言葉のユニークネスを捉える手立てとした。

- a 言葉の内容が、他に抜きん出た卓越性を有している。他にはない新たな創造性、視点に基づいて現実の在り方や関係性を捉えた言葉はその卓越性を唯一性として捉

えうる。

b 了解し合うコミュニケーション（対話）においては、他者の唯一性（差異）を承認することが前提となる。そのため、対話の相手が語る言葉から何を選択して自身の考えとして了解（合意）し、摂取（承認）したのか。対話により話者から聞き手の思考に摂取されたもの（共有された見方）を話者と聞き手の両者のユニークネスと捉える。聞き手も含むのは、話者から何を了解するのも聞き手の行為の独自性によるためである⁽¹¹⁾。

c 2人の中で交わされた対話の内容・やりとりが記録された記述をコンテキスト（物語）と解釈し、そのなかに現れた物語性を唯一のものと捉える。対話活動のなかで語り、聴く主体として活動するなかで、その人の思考がどう変容を遂げていったのか、一続きの物語として捉えたときに現れたものをその人らしさの唯一性として捉える。

なお、「人格として唯一無比であること」に関してアーレントは、「言葉と行いすべてのうちに何気なく、ともにおのずからあらわに」される「誰であるか」が他人には「誤解の余地なく一義的に現われる」が、「現れている本人にはつねに隠されたままである」と述べている⁽¹²⁾。それは「自分自身どんな人格をさらけ出しそもそも何者であるか、知ることも予測することも絶対できないのである。～ダイモーンとは、～他人から見れば当人の紛れなき同一性を形づくるのだが、当人自身だけはそれを見てとることない」⁽¹³⁾としている。上記の a～c に関連させてこれらのアーレントの記述を捉えるならば、対話の語り手は自らが語ることに於いて現れるはずの唯一性である「何者」についてはコントロールできず、共にいる「聞き手」をはじめとする他人の手に委ねられて現われるということになる。

4. 本実践研究における対話のテーマ

本実践研究において設定した対話のテーマについて以下に説明する。腎臓（臓器）を売る自由について、2人の倫理学者の異なる見解（論争）⁽¹⁴⁾を概観させた上で、「J.S.ミルの説く自由論（他者危害原則）の観点から、自分の腎臓を売る自由を認めてよいか否か」というテーマを設定した。テーマ設定にあたり、特に科目「倫理」の特性として、具体的な先哲の思想を手掛かりとして身近な社会問題に関連づけて考えさせることが目的⁽¹⁵⁾でもあるため、上記のようなテーマ設定となった。こうした点は「子どもの哲学」との違いであり、これを踏まえて、本論稿のタイトルも「哲学の対話」としている。まず、ミルの他者危害原則について、彼の『自由論』の日本語訳された原典を生徒に示し、他人（社会）に関係し、危害を与えない限り、自身の肉体についての主権者は自分であるとするミルの考える自由について理解させた。加えて、この実践で扱う対話のテーマにおいて腎臓を売る行為の主体は、他者のケアを受けるべき存在ではない判断力を有す成人であることが前提となることをミルの文章「この所説を、諸々の能力の成熟している人々にだけ適用するつもりである」を示して確認した⁽¹⁶⁾。なお、臓器の移植に関する法律による規定、腎臓移植に関わる身体的なリスク⁽¹⁷⁾、積極的な腎移植により人工透析にかかる国家の医療費が抑制される可能性など、腎臓移植による経済的な効果⁽¹⁸⁾についても参考資料として生徒に紹介し、判断の一助となるようにした。以上をうけて、生徒に提示した実際のテーマは以下に示す

とおりとなり、これについて生徒は自身の考えを形成したうえで対話活動に臨んだ。

福祉制度などが充実し、仮に社会における貧困が今よりも格段に解消され、生存権もより手厚く保障されたとします。(少なくとも、貧困のために臓器を売らずとも生活のための手当が国により確保できているとします)一方、腎臓(臓器)不足については解消できていないとします。そこで、特に差し迫って生活が困窮しているわけではないが、欲しい高級腕時計があるため、自分の腎臓を売りたいという、ミルの定義する「判断力のある成人」が現れました。そうした場合、ミルの「自由(他者危害原則)」の視点も踏まえて(ミルのこの考えについては賛成でも反対でもよいです)、社会はこの人の行為を自由として認めてよいですか?それとも認めるべきではないですか?あなたの考えを自由に以下に示してください。

このテーマでは「社会はこの人の行為を自由として認めてよいですか?」としたのは、生徒らはベンサムが「最大多数の最大幸福」を立法の原理として主張したことを直前の授業において学習しており、ミルの思想がベンサムに始まる功利主義の系譜上にあることを踏まえたためである。そのため、先に示した法律の規定や経済的な効果に関する資料も併せて判断材料とすることで、個人の自由(幸福)と社会全体の幸福との折り合いから臓器売買の自由を考える視点が獲得され、多角的に考え、学びを深められるように意図した。

5. 本実践研究の分析方法

表1 アンケートソフトに設定された質問事項

上述した対話活動において現れるユニークネスを把握するために、対話の内容を記述として残すように生徒に指示した。具体的には大手IT企業の提供するアンケートソフト⁽¹⁹⁾を利用したが、生徒は対話の前にアンケートソフト上に質問として設定された先の対話のテーマについて、自身の見解を予め回答しておき(表1の①)、2~3人を相手に1対1の対話を繰り返しながら、その都度相手の発言から参考になったことも回答する(表1の④)。最後に対話を踏まえ改めて、テーマについて自身の考えをアンケートソフトの続きに記述する(表1の⑤⑥)というものである。授業者である筆者は生徒によるこれらの記述を分析し、生徒間でお互いにどのような対話が交わされ、ユニークネスが現れたか、さらに生徒自身の思考にどのような変容がもたらされたかについて、ウェブに回収された回答を集計し、記述を表形式で整理することでトレースできるようにした。その際、先に示したa~cを視座に記述を分析した。

- | |
|---|
| <p>① 「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択し、その理由をミルの「自由」の視点を踏まえて、あなたの考えを、自由に以下に述べてください。</p> <p>② 一人目は誰と話しましたか?(名前)※三人の対話相手のうち最低でも一人は自分と異なる立場の人と話してください。</p> <p>③ テーマの質問についての一人目の立場は?</p> <p>④ テーマの質問について一人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか?(以下、同じ質問が二名分続く)</p> <p>⑤ 対話を踏まえて、もう一度、貧困が解消された場合、自分の腎臓を売ることは許されますか?許されませんか?あなたの立場を「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」から選んでください。</p> <p>⑥ 対話を踏まえて、もう一度上で「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択した理由をミルの「他者危害原則」の視点を踏まえて、自分の考えを述べてください。</p> |
|---|

6. 「認めてよい」と判断し、立場を変更しなかった生徒の分析

本実践の対話のテーマについて、対話前と対話後で生徒が選択した立場の人数をまとめたものが表2である。対話前・対話後ともに最も多いのは「認めてよい」とする立場である。また、対話後における立場の変化の有無と人数をまとめたものが表3である。表3によると、対話後も立場に変化がなく、「認めてよい」とした生徒が11名で最多であったことがわかる。この11名に立場の変化がないことは、新しい視点は獲得されず、対話を通じた自身の考えの更新や変容はなかったということだろうか。それはまた、話し手から立ち上がるユニークネスが本当に聞き手に何の痕跡も残さなかったということであろうか。それらを確認するために、実際の生徒の記述のいくつかを以下に検討したい。

表2 腎臓売買の自由について
対話前と対話後における生徒の
立場別による人数

	立場	人数
対話前	認めてよい	15
	認めるべきではない	4
	どちらでもない	2
対話後	認めてよい	13
	認めるべきではない	4
	どちらでもない	4

表3 腎臓売買の自由について対話後における
立場毎の人数

変化の有無	立場	人数	計
変化なし	認めてよい	11	13
	認めるべきではない	2	
	どちらでもない	3	
変化あり	認めてよい→どちらでもない	1	8
	認めてよい→認めるべきではない	1	
	認めるべきではない→認めてよい	1	
	認めるべきではない→どちらでもない	1	
	どちらでもない→認めてよい	1	

11名のうち生徒A、Bの対話活動の記述を表計算ソフトに纏めたものが表4である。

表4 「認めてよい」の立場で変化がない生徒Aと生徒Bの記述（太字は筆者による。以下同じ）

対話前 氏名 の 立場	「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択した理由をミルの「自由」の視点を踏まえて、あなたの考えを、自由に以下に述べてください。	一人目・立場	二人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	二人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	三人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	三人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	対話後の立場	対話を踏まえてもう一度上で「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択した理由をミルの「他者危害原則」の視点を踏まえて、自分の考えを述べてください。	
A	私は認めて良いと思う。彼は貧困ではなく、自分の意思で「臓器を売りたい」とおもったので、それは「自由である」と思うからです。確かに「高級腕時計を買うなんて馬鹿らしい」と思うけれど、彼にとってはそれが命に変えてでも(臓器を売っても)欲しいものだから、認めてもいいのではないかと。	C・認めてよい	自分の意思でしっかり考えて、最終的に「腎臓を売ってほしい」と思うなら売ればよいし、それによって助かる人が出てくるならそれもそれでよい。	D・認めてよい	腎臓不足は解消されていないから、腎臓が売られたことで提供できる腎臓が増えるなら社会にとつていい事である。	E・認めるべきではない	腕時計のために腎臓を売る行為は、そもそもおかしいし、親や周りの人を悲しませているから行けないと思う。	認めてよい	認めてもいいと思う。彼は誰にも迷惑をかけてないないどころか、提供できる腎臓を増やすことや高級腕時計をかって経済を回すことで他人に利益を与えているから。でも正直、友人が「時計のために腎臓売ろうと思うんだ」と言ってきたら絶対に止めてしまおうとおもう。
B	社会にとって何ら不利益がないし、他者自由原則にも当たらないので、認めてよいのではないかと考える。	D・認めてよい	他者自由原則に当たらないし、社会では腎臓不足になっているので腎臓移植は、社会にとつていいことだと思った。自分の意見を後付け。	F・認めるべきではない	臓器移植は、家族とかにも不安にさせることあるし、密輸問題は社会にとつても悪いこと。献血と違って、腎臓は修復不可能。	G・認めてよい	他者原理原則に従っているので大丈夫。自分の腎臓と高級時計と比較して、同等の価値があるなら、認めてもいいと思う。	認めてよい	他者危害原則に当たらないし、自分の腎臓と高級時計を比較して、同等の価値があると判断したなら、認めてもいいと思います。余談ですが、献血も自分の体を分けているので、認めていいかなと思っただけですが、献血は無限に作れますが、腎臓は1つで修復不可能、なので献血感覚で気軽にできないので、個人でしっかり判断した上で、個人の自由を認めるべきだと思う。

まず、生徒 A の対話活動をトレースする。対話前に「確かに『高級腕時計を買うなんて馬鹿らしい』と思うけれど、彼にとってはそれが命に変えてでも(臓器を売ってでも)欲しいものなのだから、認めてもいいのではないか」と記述しているように、ミルの立場を忠実に踏まえた記述であることが分かるが、やや表面的な内容にとどまっており、独自性を強く看取させるまでには至っていない。2人目に生徒 D と対話するなかでは、「腎臓が増えるなら社会にとっていい事である」という意見が参考になったと感得している。この生徒 D から得た視点は、生徒 A の対話後の記述を見ると「提供できる腎臓を増やすことや高級腕時計をかって経済を回すことで他人に利益を与えている」という、単に相手の考えをなぞるだけではなく、対話を踏まえて、社会全体における幸福の増幅という功利主義の視点を具体化して新たに発展的な内容に高めたと読み取ることができる。先に示した「ユニークネスを捉える手立て」の a (以下、手立て a と記し、他の手立てについても同様とする) の視座から捉えるならば、この記述は生徒 A による新しい現実の捉え方として卓越性を示すユニークネスであると看取できよう。また、3人目の相手となった「認めるべきではない」という異なる立場をとる生徒 E からは「親や周りの人を悲しませているから行けないと思う」とする点が参考になったとしている。手立て b を視座に対話後の記述を評価すると、「友人が『時計のために腎臓を売ろうと思うんだ』と言ってきたら絶対に止めてしまおうとおもう」と、自身の立場とは矛盾する内容をも取り込み、了解し、複雑だが深まりのある内容となり、矛盾を含む記述がかえって生徒 A のユニークネスとして立ち現れてくる。同時に、生徒 A とは逆の立場にありながら生徒 A の思考に了解され、摂取(共有)された生徒 E の「親や周りの人を悲しませているから行けないと思う」という言葉は生徒 E のユニークネスとしても捉えられ、その影響力の大きさをうかがわせるものと評価できる。

次に生徒 B の記述をトレースする。生徒 B は2人目に反対の立場の生徒 F と対話し、献血との違いが参考になったとしている。最後の記述でも腎臓を売る行為と献血との違いに触れ、「腎臓は1つで修復不可能」⁽²⁰⁾であるため慎重に判断しなければならないとして生徒 B は生徒 F の言葉を了解し、摂取している。手立て b に照らし、これも自身とは反対の意見であるが、了解し、組み入れて臓器を売る自由を認めるも、軽々に判断してはならないという高次の思考へと変容したことは、生徒 B のユニークネスであり、それを触発した生徒 F の思考もユニークネスとなる。なお、生徒 F が述べたであろう「臓器移植は家族とかにも不安にさせる」という内容については次章に詳しく扱うが、これについて生徒 B は対話後の記述において触れていない。アーレントも指摘するように、対話の相手から何を摂取するのかについては聞き手に任されるものであることがわかる。

以上に腎臓を売る行為について「認めてよい」とする立場に変化はないものの、その思考に変容が見られた生徒の例を確認できた。特にこの生徒 A, B は自身とは反対の立場をとる意見も取り込む柔軟性と開放性を発揮しながら、破綻することなく自身の立場を維持して意見を纏め上げたのは、相応の思考の努力があつて成せるものであり、能力としての寛容を印象づける。また、この2名については同じ「認めてよい」という立場でありながら、対話後のテーマに関する記述は生徒 A, B とも異なる内容になっており、各々の独自性となっているともいえるだろう。というのも、当然のことながらそれらは各々の対話活動から導かれたものであり、表4に示された生徒 A, B の一人ずつの左から右へと展開する対話活動の記録は、何人かとの対話を経過した思考の変遷(変容)というコンテクスト、つま

り物語としても捉えることができ、その物語の主体として生徒 A, B が（ソクラテスが様々な相手と問答をしたように）読み手の前に立ち現れてくるからだ。つまり、手立て c を視座に生徒 A, B のそれぞれの対話活動の全体像をユニークネスとして捉えることも可能である。紙幅の都合により本論稿では触れていない生徒 A, B 以外の「認めてよい」とし、立場に変化のない他の生徒 9 名についても一人ひとりにテーマに対する対話後の記述（結論）へと向かうコンテキストが存在する。テーマに対する立場は同じとしても、そのコンテキストは誰ひとりとして同じにはならないのである。なお、立場に変更のないこれら 11 名の生徒について、テーマに対する考えを示すのに用いられた対話前後の言葉にも変容を認めることができたことを付け加えておきたい⁽²¹⁾。また、立場に変化のない生徒としては、「認めるべきではない」とした 2 名の生徒がいた（表 3 参照）。彼らの立場にも変化がないことは、やはり新しい視点は獲得されず、対話を通じた自身の考えの更新はなかったということなのか、次章にこのうちの 1 名とその対話に関わった生徒らの対話を検討する。

7. 「認めるべきではない」と立場を変更しなかった生徒の分析

テーマについて「認めるべきではない」と立場を変更しなかったのは生徒 F と生徒 H である。生徒 F, H の対話前の記述を分析すると共通する点があることに気付く。それは生徒 F と彼と対話をした生徒 I, L の 3 人の記述を展開した表 5 の生徒 F の対話前の記述にあるように家族の存在を根拠にしているということである。

ここでは生徒 F（前章で生徒 B に献血の視点を与えた生徒でもある）について検討したい。表 5 より、生徒 F は同じ立場の生徒 H との対話を挟みながら「認めてよい」とする 2 名の生徒 I, B と対話をしたことがわかる。彼らとの対話において参考になったとする記述は量的に少ないが、生徒 H とは同じ考えであることが記述されている。対話活動後におけるテーマに関する記述でも太字で示した箇所に対話前と同様の内容が見て取れ、親が「悲しくなって悪影響がでるのではないか」としている。生徒 F にとっては対話活動が思考に大きな変容をもたらす影響を与えるものではなかったといえる。

一方で、生徒 F と対話をした生徒 I, L についてはどのような対話活動になったのであろうか。生徒 I は 1 人目の相手として、生徒 L は 2 人目の相手として生徒 F と対話をしたことが分かるが、太字で示したように「親が悲しんだり」、「自分の親族がやっていたらいい気がしない」ことが生徒 F から感得されている。そして、対話後においては生徒 I, L とともに立場を「認めてよい」から「どちらでもない」に変更したことが分かる。対話後の記述において生徒 I は「認められることで悲しむ人も多数いるというみんなからの意見を聞いて認められるかどうかはなかなか決めることが出来ない」と記しており、「どちらでもない」という立場の変更の背景には生徒 F からの影響が大きかったことが窺える。また、生徒 L は対話後のテーマに関する記述において「確かに自分の親族がこんなことしてものを買ってたら嫌だなと思う」との記述を残しており、後半には社会にもネガティブな影響を与えることが述べられている。手立て b を視座とした場合、生徒 I, L において了解され、摂取された内容から判断すると、親族を引き合いに出して認めるべきではないとしたことが生徒 I, L を含めた生徒 F のユニークネスであると考えられる。しかも、生徒 F と対話した生徒 I・L はいずれも対話後に立場を変更しており、2 名において現れた生徒 F のユニーク

表 5 「認めるべきではない」の立場で変化がない生徒 F と関連する生徒の記述

対話前の立場 氏名	「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択した理由をミルの「自由」の視点を踏まえて、あなたの考えを、自由に以下に述べてください。	一人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	二人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	三人目の意見で自分とは異なる点や参考になったのはどのようなことでしたか？	対話後の立場 対話を踏まえてもう一度上で「認めてよい」、「認めるべきではない」、「どちらでもない」のいずれかを選択した理由をミルの「他者危害原則」の視点を踏まえて、自分の考えを述べてください。
F	このように1人の欲望を認めてしまうと、腎臓を売るという行為が増えてしまうと思うし、欲望だけのために自分の大切な体をどんどん犠牲にするのは良くないと思う。また、今国際社会で腎臓を含めた臓器密輸などが問題となっている中で、この人を認めてしまうと、臓器密輸などの問題が深刻化したり、犯罪行為がエスカレートしたりする。一番は、親から恵んでもらった体の一部をそんなふうに加えて、簡単に売るとするのは良くないと思う。	他人には悪影響を与えていない I・認めてよい	自分と同じような感じでした。 H・認めるべきではない	他人自由原則に当たらないし、臓器不足して社会にとってはいいことだと思う。 B・認めてよい	さっきも言ったように、他者に悪影響を与えるという点では、自分を一生懸命に産んでくれた親の人が、それを聞いた時に悲しくなって悪影響が出るのではないかと。また、腎臓などの臓器の売買を一般化すると、臓器密輸などの問題が深刻化したり、それこそ逆に社会に対して悪影響が出たりするのではないかと。
I	誰か他人に悪影響が出るわけでもなく臓器を提供したい人はお金が手に入るし、提供される人は必要な臓器が手に入るの、両者にいい影響を与えられると考えたから。	親が悲しんだり社会的に見て許される行為じゃないからという意見 F・認めるべきではない	臓器不足というところと自分が賛賞をしたというところで両者の意思が一致しているというところ。 J・認めてよい	いい面では国はどんな理由で臓器を売ろうとしているかを知らないからという意見で、反対の面で貧困ビジネスが許容されてしまうと貧困層の中で不幸になってしまう人が出てしまうという意見。 K・どちらでもない	臓器を提供する側とされる側どちらにもいい影響があるため、認められてもいいのではないと思うが、その中で認められることで悲しむ人も多数いるというみんなからの意見を聞いて認められるかどうかはなかなか決めることが出来ないなと思いました。
L	他人に危害を与えるわけでもないし、判断力のある大人なので認めてよい	認めてよいと思うが不法なビジネスなどに繋がってしまうので一般的に広まってしまふのはよくない。 K・認めてよい	臓器売買が深刻化してしまうと、臓器密輸などの問題が出てくる恐れがある自分の親族がやっていたらいい気がしない F・認めるべきではない	斜線部分には3人目との対話がないことを示す。	
					確かに自分の親族がこんなこととしてものを買ってたら嫌だなと思うし、働かないで利益を得ることになるので社会的にも良くないと思った。密輸などに繋がって、どろどろな社会になりそうなので、認めるべきではないと思った。

注：生徒 L は生徒 F の 4 人目の対話相手である。斜線部分は 3 人目との対話がないことを示す。

クネスは、了解し、摂取されるだけでなく、自分の立場を変更するほどの意義や価値を有していたことになる。では、生徒 F が親や家族を引き合いに出して示した意義や価値とは何であろうか。

これについては、何かしらの倫理的・道徳的判断が迫られる場面においては、自らの属する共同体から要請され、身につけられた価値観・道徳観（共通善）が判断規準として機能するものであり、それらが訴求してくる力を無視して一般的な倫理的・道徳的判断をすることは困難であることを示唆するものであると考えられないだろうか。そしてこの観点から親や家族を根拠に「認めるべきではない」と立場を一貫した生徒 F の対話の記述について検討するとき、それらの判断規準が思考の開放性よりも優越することがあることを示すとも考えられないだろうか。そうした価値観や道徳観、ここでは、自分産んでくれた親を悲しませてはならないと示されている価値観は儒教の經典『孝経』に説かれる「身体髮膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」にも通じ、生徒 F の記述に表れていたのは、こうした親族を基盤とする共同体的な倫理観を連想させるものであったといえる。

生徒 F の対話は机上の理論・理屈だけで善や正義を判断することはできないという別の判断規準が存在していることに気付かせるものであり、手立て a の視座から吟味すると他に抜きん出た卓越性を感じさせるものであり、また、立場を変更しなかったというコンテクストそのものも、手だて c からすると生徒 F のユニークネスとして立ち現れてくる。

8. 結びに

アーレントの示した概念である「言論」に関する研究からレビューされた3つの立場を基に、生徒の発話からユニークネスをどのように把握し、評価することが可能であるかということについて、以上に検討した。第1章において述べたように、量的に還元する評価とは別の次元で、対話に参加した全員の存在を他の誰でもない唯一の存在として捉え、質的に評価する方法論としてアーレント思想の解釈を援用したことは、突飛な印象を与えるかもしれない。一方で、複数の生徒が参加するインタラクティブな対話活動においては、一人ひとりに優劣の序列化をする評価だけでは捉えられない存在の意義があり、それを明示できないかという願いが、語る言葉からユニークネスという唯一性が現れるというアーレントの思想に結びつきうることは、教室において対話活動を執り行う者にとって一定の理解を得られるのではないかとも考える。ユニークネスを捉える3つの手立て a~c の内容も本来の意義からは離れているものもあり、評価のフレームとしての妥当性については、今後も実践を重ねるなかでさらに検討すべきものであろう。

また、授業に参加した全員分の記述を授業者としてトレースしたものの、紙幅の都合により本論稿に掲載した記述例はその一部にすぎない。立場に変化がなかった生徒を中心に、限られた事例のみが分析されているという批判はあろう。一方で、立場に変化のあった生徒は表3に示されるように対話を通じた変化のバリエーションが各々多様であり、手だて c に照らすと、対話活動のコンテクスト（物語）の結末、つまり個々の変容の多様性を彼らのユニークネスと捉えることが可能であるといえる。

【註】

- (1) ハンナ・アーレント（森一郎訳）：『活動的生』、みすず書房、pp.219-220.(2015)
- (2) アーレントは前掲書（p.256）において以下のように述べている。「ポリスは、厳密に解するならば、地理的に場所を確定できるような都市ではない。むしろポリスとは、その住民が互いに行為し合い言論を交わし合うことから生ずるような、住民の組織構造のことなのである。ポリスの現実の空間は、こうした相互共存という本義ゆえに共生している人びとの間に存しており、彼らが現に今どこにいるかには左右されない。」哲学の対話を通じた協働的な学びが行われる教室がポリス的（公共的）な空間になりうることには理があるといえよう。
- (3) なお、アーレントによるこの一節を志水速雄は「ユニークな人格的アイデンティティ」（『人間の条件』、ちくま学芸文庫、(1994)p.291 と訳している。「unique」の「uni」は唯一性を意味し、「面白さ」というような意味は元来ない。本論稿では、「自分という存在が人格として唯一無比であること」を「ユニークネス」と言い換え、唯一性という意味で示すこととする。
- (4) 梶谷真司：『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』、幻冬舎、(2018) p.57
- (5) 松島恒熙は「哲学対話の生起と「参加」概念について—アーレント思想を手引きに—」（『倫

- 理道徳教育研究』, 第六号, pp.31-45.(2023) p.33)において「アーレントにとっては, 単にその場に居ることと世界へ現れる(appear)ことはまったく別のことである」と述べている。
- (6) 本実践は 2022 年に筆者の勤務した高等学校において実施され, 生徒の記述は匿名化して本論稿に掲載することを本人・保護者から承諾を得た。また, 誤字・脱字もそのままを記載する。
- (7) Echeverria,E., Hannam,P.: The community of philosophical inquiry (P4C): A pedagogical proposal for advancing democracy, Gregory, M., Hynes,J.and Murriss,K(Eds.), *International Handbook of Philosophy for Children*, Routledge, pp.3-10. (2017) p.6.
- (8) この対話法については筆者による「2人で行う対話活動の実践とその意義について - 高等学校公民科「倫理」における授業を通じて -」(信州大学教育学部研究論集, 第 17 号, pp.65-84.(2023)) に示される方法を参照されたい。
- (9) 橋爪大輝:「活動/行為 それは語りなのか」, 日本アーレント研究会編『アーレント読本』, 法政大学出版局, pp.59-68. (2020) pp.60-67.
- (10) 橋爪: 前掲書, p.68.
- (11) 河野哲也は対話そのものが政治的活動であることを指摘しているが(『こども哲学で対話力と思考力を育てる』, 河出ブックス, (2014)p.73), 民主的な政治過程(対話)が単なる意見の同一化を志向するものではなく, 多くの異なる立場を破綻なく総合する努力であるのと同様に, 評価の手立ても単純な全面的同意を「了解」として評価しようとするものではない。
- (12) ハンナ・アーレント: 前掲書, p.224.
- (13) ハンナ・アーレント: 前掲書, p.247. (なお, ダイモーンは古代ギリシアにおいて個人を導く神霊を意味する)
- (14) J.Radcliffe-Richards らによる The case for allowing kidney sales (*The Lancet*, Vol.351, pp.1950-1952.(1998)) と浅野幸治による「完全自由主義の立場からの臓器売買容認論・禁止論」(『豊田工業大学ディスカッションペーパー』, 第 6 号, pp.1-25.(2011)) を参考にした。「娘の命を救う手術の費用を払うために自分の腎臓を売る父親」の合法化を説くラドクリフ・リチャーズに対し, 浅野は父親の背景には貧困があり, それは自由な選択意志ではなく, 生存権の保障がない以上, 自由な選択意志は成立不可能であるとする。
- (15) 『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示) 解説 公民編』, 東京書籍(2019)p.104.
- (16) J.S.ミル(塩尻公明, 木村健康訳): 『自由論』, 岩波文庫(2017)p.25
- (17) 示した内容は一般社団法人全国腎臓病協議会 HP「ドナーのリスクについて」<https://www.zjk.or.jp/sp/detail/page/40#anchor16> を参考にした。(2022 年 6 月 20 日閲覧)
- (18) 示した内容は齋藤和英・高橋公太「総説腎移植シリーズ 腎移植: わが国と世界の趨勢を比較して」(『日腎会誌』, 46 巻 1 号, pp.2-11.(2004)p.7) を参考にした。
- (19) Google 社の Google Forms を利用し, 表 1 に示す質問群に回答する方法を採用した。
- (20) 腎臓の 1 つを売ってしまった後のことを述べていると考えられる。
- (21) 「認めてよい」とした 11 名の対話前と対話後のテーマについての記述(質問事項①と⑥の回答)に使用された語句を樋口耕一による KH Coder 3.Beta.04a を利用し, 計量テキスト分析した。質問①, ⑥の記述からそれぞれ 1 回以上出現した語句(頻出語句 150 語で抽出した語句のうち 1 回以上出現した語句)を抽出し, それらの語句を「対話前のみで使用された語句」・「共通して使用された語句」・「対話後のみで使用された語句」の 3 区分に分類するとそれぞれ 47 語・52 語・62 語となった(図 1)。つまり, 対話後は半数以上の 54.4% が対話前には使用されていなかった新

しい語句に置き換わったことが分析された。なお、対話前後の記述とも強制抽出した語句は連結語などの「時計・他者危害原則・他者危害・悪影響・win-win・臓器不足」を、使用しない語句として一般的な語句「思う・考える」と「腕時計」, 「高級時計」を「時計」に一括するため「腕・高級」を指定した。

図 1 「認めてよい」の立場に変化のない 11 名による対話前後の記述において 1 回以上出現した語句を分類

対話前のみ使用された47語	共通して使用された52語	対話後のみ使用された62語
意思 関係 生活 稼ぐ 及ぶ 責任 自身 救える 選ぶ 命 金 相手 あと 決定 増える お互い 嫌 誰か それぞれ 行う 肉体 どんな 高い 馬鹿らしい まあ 困窮 売れる やむを得ず 差し迫る 不利益 アドバイス 持つ 変える 違う 実行 方法 何ら 主権 本人 加える 寿命 優先 家族 上 贅沢 確か 色々 (形容動詞)	腎臓 お金 結果 売る 影響 個人 自分 価値 後悔 認める 解消 行為 人 健康 社会 他者 原則 場合 自由 言う 役に立つ 状況 手段 理由 時計 需要 同等 欲しい 助かる 貧困 悪影響 生きる 不足 危害 選択 本当に 臓器 臓器不足 迷惑 買う 他 役 win-win 体 与える リスク 提供 立つ 及ぼす 贅沢 当たる 決める (名詞) 45.6%	献血 成人 作れる 判断 正直 止める 悪い 絶対に 自分勝手 改善 前提 手 考え 全体 受ける 他者危害 増やす 宗教 だめ 尊重 修復 まとも 他者危害原則 少し 悪用 他人 少ない 移植 対話 条件 一部 達成 食べる 可能 定数 付け加える 回す 踏まえる 分ける 外出 豚肉 変わる 感覚 入る 無限 基準 肌 目的 気軽 反する 貰える 牛肉 否定 友人 経済 比較 余談 考え方 不可能 利益 露出 良い 54.4%
対話前に使用された99語	対話後に使用された114語	